

2022 SUPER FORMULA Team Report : Round 9 & 10

2022.11.1

Round 9&10 鈴鹿サーキット(5.807km)

佐藤蓮、第9戦で初表彰台を獲得！

- ・佐藤蓮、得意の鈴鹿、第9戦でSF初表彰台を獲得
第10戦は19位となるも、ファステストラップを記録し、ルーキー・オブ・ザ・イヤーも獲得
- ・三宅淳詞、第9戦でファステストラップを記録するも12位フィニッシュ
第10戦では8位入賞、3ポイントを獲得し、ルーキーイヤーを締めくくる



第9戦

・予選:10月29日 天候: 晴れ、18℃ 路面: ドライ、27℃
 ・決勝:10月29日 天候: 晴れ、19℃ 路面: ドライ、30℃

◆53号車 佐藤 蓮

予 選: 9番手(1分36秒843)
 決 勝: 3位

◆55号車 三宅 淳詞

予 選: 14手(1分37秒302)
 決 勝: 12位
 (ファステストラップ1分40秒056)

第10戦

・予選:10月30日 天候: 晴れ、17℃ 路面: ドライ、20℃
 ・決勝:10月30日 天候: 晴れ、21℃ 路面: ドライ、32℃

◆53号車 佐藤 蓮

予 選: 14番手(1分37秒458)
 決 勝: 19位
 (ファステストラップ1分39秒362)

◆55号車 三宅 淳詞

予 選: 8番手(1分36秒738)
 決 勝: 8位

10月29日(土)、30日(日)の2日間、三重県の鈴鹿サーキットで2022年全日本スーパーフォーミュラ選手権の最終大会となる第9戦、第10戦が行われました。

土曜日に予選と決勝が行われた第9戦では、9番手からスタートしたTEAM GOHの53号車をドライブする佐藤蓮が3位でフィニッシュ、SFでの初表彰台を獲得しました。

翌30日(日)の第10戦では僅かな差でQ1を突破できず、14番手からスタートした佐藤は、2回入ったSCのリスタート後それぞれで順位を落とす厳しい展開となり19位でチェッカーを受けましたが、レース終盤24周回目に1分39秒362のファステストラップを記録し、速さを印象づけてルーキーイヤーを締めくくりました。

一方、55号車の三宅淳詞は、第9戦はQ2進出を果たせずに14番手からスタート。レースペースは良く、12周回目にファステストを記録しながらも、トラフィックに泣かされる展開で12位フィニッシュ、ポイント獲得には届きませんでした。

今季最終戦の第10戦では、命題であるQ1突破に向けてダイナミックにセットを変更し、8番グリッドを獲得しましたが、前日とはかわってペースを上げることができずに守りのレースに。最終的に8番手を守り切り、3ポイント獲得して、SF初年度のシーズンを終えました。

今季のルーキー・オブ・ザ・イヤーはTEAM GOHのふたり、佐藤と三宅で争う中、決着は最終戦まで持ち越されましたが、第9戦で3位となった佐藤が11ポイントを追加し今季累計25ポイントに。第10戦で三宅が7ポイント差を追う展開となり、三宅は8位入手で3ポイントを手にしませんが、4ポイント届かずに、佐藤蓮がルーキー・オブ・ザ・イヤーを獲得しました。



◆チーム監督 山本雅史

「土曜日は、53号車の蓮くんが初めて表彰台を獲得ということで、本当に良かったです。予選は、Q1を良いタイムで突破したのですが、Q2でタイムが伸び切らず、9番手からのスタートとなりました。その部分を解消して、日曜日の第10戦ではさらに前方からスタートできるようにしようと強く思いました。レース自体はセットアップも良い方向を見つけことができ、ドライバーも本当によく頑張ってくれて、スタートの、あの1週目、2週目が第9戦を決めたと思います。そこから徐々に順位をあげて、初のポディウムおめでとう、という結果になりました」

「土曜日に素晴らしいレースをしてくれて3位ポディウムを獲得したので、第10戦は最終戦ですし、予選をちょっと攻めにいったのですが、ほんのちょっとの差でQ1は7番手に終わり、Q2に進めませんでした」

「結果、決勝14番手からのスタートだったのですが、スタート後ちょっとうまくペースが上げられませんでした。1周目に他車のクラッシュでSCが入り、ラッキーかなと思ったのですが、そのSC明け、グリーンになったところでスピンを喫してしまい、最下位になってしまいました。その後はトップに遜色ないペースで追い上げていたのですが、2回目のSC後、リスタートで、前車を追い抜こうとして接触してしまい、フロントウイングを損傷、2回目のピットインとなりました。そこからは最下位を走るレースになってしまったのですが、ペースは良く、ファステストも出し、残念なレースではありましたが、レースのセットとしては良いものがみつかったので、また今後につなげていけると考えています」

「55号車の三宅君の第9戦は、Q1で約1/100秒が足りずにQ2に進むことができずに、14番手からのスタートとなりました。結果的にファステストを記録しましたが、混戦しているトラフィックの中に入っ



てしまい、自分のペースが作れずに、ちょっと厳しいレースになってしまいました。日曜日の最終戦については、解決すべき課題は解決し、しっかり良い方向をみつけて、良い結果を出すべく頑張ろうと思いました」

「三宅君の第10戦では、課題となっていた予選についてダイナミックにセットアップを変更しました。それが良い方向について、Q1 突破、予選は 8 番手となりました。決勝レースについても前日のものからちょっとセットアップをいじったのですが、それが上手い方向にはいかず、フロントのアンダー傾向が強く、ドライバビリティが低いセッティングなったしまったことで、ドライバーにはかわいそうなことをしました。それでも、途中アップダウンはあったものの、なんとか堪えて 8 位でフィニッシュし、ポイントをとってくれたので良かったと思います。色々課題もありますので、来年に向けて、さらに良いチーム作りをしたいと思います」

◆53 号車ドライバー 佐藤蓮

「第 9 戦では 9 番手からのスタートでしたが、スタートで 1 台、続く 2 周目でもさらに 1 台とオーバーテイクを重ねて、最終的には 3 位でフィニッシュできて、初めて表彰台にのぼることができました。素晴らしいクルマに仕上げてくれ、レースの間中、常に細かいさまざまなインフォメーションを無線で入れ続けてくれたチームの皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。鈴鹿はスクールで走りこんだサーキットなので、抜けるポイントなどもよくわかっており、先輩ドライバーに対しても、躊躇なく仕掛けていくことができました」

「日曜日の第 10 戦では、予選は惜しいところで Q1 突破できずに、決勝は 14 番手からのスタートになりました。オープニングラップで入った最初の SC 明けにスピンを喫して最後尾まで落ちてしまい、2 回目の SC 明けには後ろから追いつける展開だったので



が、バトル途中での接触によりフロントウイングを破損させてしまった為に、レースの勝負権を失うことになってしまいました。レースペースとしてはファステストを記録でき、とても良いポテンシャルがあったと思うのですが、自分自身のレースの組み立ての悪さが課題として残りました」

「今季は SF 初参戦でしたが、多くを学んだ盛り多きシーズンでした。参戦するにあたり尽力して下さった関係者の皆さまや、応援して下さったファンの皆さまに、心から感謝いたします」

◆53 号車エンジニア ライアン・ディングル

「金曜日の FP のポジションは下方に沈んでいましたが、流れるにはしっかりしていて、改善点については第 9 戦予選までに解消できたと思いますが、まだ課題が残っていました。レースのパフォーマンスは高く、それはクルマの仕上がりだけでなく、ドライバーが準備含めてとても頑張ってくれ、ドライビングのアジャストについてもこれまで以上に力を入れてくれました。ドライバーの努力とチームの努力がようやく実って、結果を出すことができました。ただ、3 位で満足しているわけにはいきませんので、翌日の今シーズン最終戦では優勝を狙って、さらに頑張ろうと思っていました」

「第 10 戦の予選では、前日のデータをベースにアジャストし、フィーリングは良かったと思いますが、1 か所ミスがあり、若干タイムが足りずに Q1 を突破できませんでした」

「レースのセットについては前日第 9 戦の良いベースがあり、日曜日はまたコンディションが違ったので、そこにアジャストを入れて、ペースは良かったんじゃないかと思います。ただ、14 番手からのスタートということでドライバーには心理的な焦りというかプレッシャーというか、頑張り過ぎてしまうような部分があった



「かもしれず、そこから小さなミスやリスクマネジメントに影響があって、残念なことにつながってしまったと思います」

「十分速さはみせてくれましたし、ルーキー・オブ・ザ・イヤーも手にできて良かったと思う反面、正直なところ、もう少し上でフィニッシュできたらという気持ちもあるので、そこは今後につなげていきたいと思えます」



◆55号車ドライバー 三宅淳詞

「土曜日の第9戦では予選で後方に沈んでしまったのが厳しかったのですが、スタートも前大会のもてぎに続いてあまり上手いかず、順位を落としてしまったので、原因をみつけないといけないと思いました。その後はクルマの調子が良く、ピットイン後の前が詰まっている状態で走っている中でもファステストを記録することができたことから、予選で前方のグリッドを確保できれば、表彰台や優勝さえも狙っていけるポテンシャルを感じていました。日曜日の最終戦に向けて、チームとともに課題解決に向けて土曜日夜に力を尽くしました」

「日曜日の最終戦ではQ2進出を果たして前方からスタートする為に、前の晩にチームの皆さんとドライビングをはじめ全てを見直した結果、第10戦はQ1を突破することができ、それほど前ではありませんが、昨日よりは良い8番手からのスタートとなりました」

「スタートはここ数戦調子が悪かったのですが、原因について思い当たることもあり、昨晩はメカニックの皆さんに夜遅くまでデータやクラッチなど、全て見直し・確認をしていただき、悪くないスタートでいけたのですが、難しいのは、昨日良かったロングが、今日は全然うまく走れない、という部分があり、追い上げていく予定だったのですが、結局守るレースになってしまいました」

「終盤は牧野選手に追われる展開でしたが、チームからの無線での情報や、OTSを駆使することで、上手くディフェンスすることができました。そういったところは、今シーズンを通して、成長できた部分かなと思います。今季参戦にあたりお世話になった関係者の皆様、そして応援して下さったファンの皆様、ありがとうございました」



◆55号車エンジニア 岡島慎太郎

「第9戦の予選は1/100秒が足りずにQ1を突破できなかったのですが、それはセットももう少し、ということと、ドライビングにも課題があったと思いますので、お互いそこを詰めていく必要がありました。また、トップに対してパフォーマンスの差があることもあり、翌日の最終戦予選セットは大きく見直す必要がありました。第9戦決勝はスタートでつまずいたことがあります。レースのパフォーマンスはかなり良かったと思います」

「戦略的には10週目にピットインし、アンダーカットを狙っていたのですが、他の選手に引っかけってしまったことにより、後半ペースを上げることができなかったのがもったいなかった。第10戦に向けては戦略についても再考する必要がありました。セットについてはパフォーマンスが高かったと思いますし、実際ファステストも出せているので、その決勝セットの良い部分を翌日の予選にも活かせる方向で検討しました」

「第10戦予選はQ1突破できるクルマに仕上げるとするのが命題でしたが、ドライバーもドライビングを頑張ってくれてQ2進出がかない、決勝はポイント圏内の8番手からスタートとなりました。予選は前日のラウンド9から改善できたという点で評価できると思います」

「一方、レースについてはセット側での課題が大きく、土曜日のベースセットからパフォーマンスが下がってしまったことでスタートポジションの8番手から順位を上げられなかったのかなと、残念に思います。戦略的にも早めにピットインさせることしかできない状況だったので、もう少し車両のパフォーマンスが高ければ違った戦略がとれたのかなと考えています。来季は車両がかわってくると思いますので今年の経験が生かせるか現時点ではわかりませんが、今後諸々つなげていければと思います」





###